

毎日小学生新聞編集部
郵便 千100-8051 (住所不要)
ファクス 03-3212-2591 電話03-3212-0321
メール maishou@mainichi.co.jp

毎日小学生新聞

MAINICHI
発行所 毎日新聞東京本社
〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1

配達お問い合わせ
購読お申し込み

0120-468-012
(6-21時、一部地域は平日10-18時)

定価 1か月1750円 (本体1620円、消費税130円)・1部70円

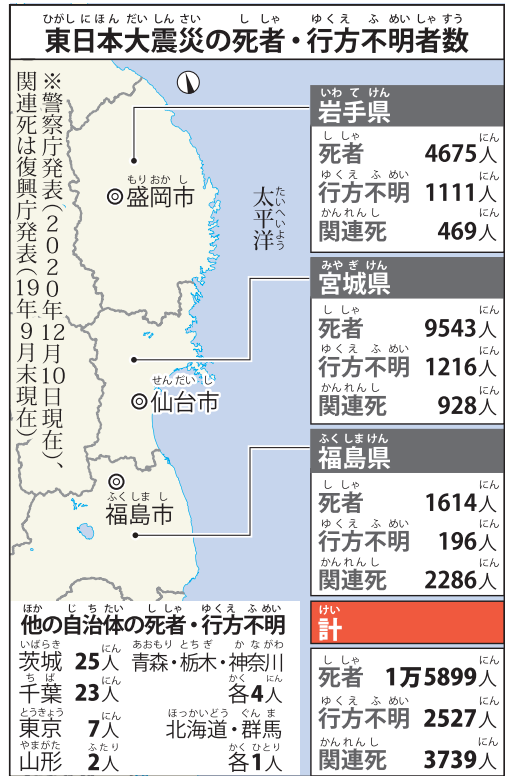


東日本大震災
10周年
「あの日」に学ぶ
社会 <上>

今年3月11日で東日本大震災の発生から、ちょうど10年となります。今、小学校で学んでいるみなさんはこの震災の時にまだ生まれていなかったか、幼い時の出来事であり記憶がない人がほとんどでしょう。教科ごとに震災や防災を学ぶシリーズ「『あの日』に学ぶ」を始めます。1回目は「社会<上>～震災って何？」です。 【百武信幸】

東日本大震災は、学年末が近づくと2011年3月11日に起きました。下校する時刻の前後にあたる午後2時46分。激しいゆれの後、がれきを巻き込んだ真っ黒い津波が東北沿岸などをおそいまし

黒い津波がおそってき



津波は高いところでも10階以上に相当する40メートル、街をまるごとのみ込みました。家や車、木々などは流され、多くの人がおぼれて亡くなったのです。津波で命を失ったケースのみならず、震災後、避難中に体調をくずす「関連死」も発生しました。

津波で海に流されるなどして今も見つかっていない「行方不明者」も合わせると、震災の犠牲者は全国で2万2000人以上に達します。国の統計によると、震災で亡くなった子どもは少なくとも0.9歳は466人、10歳未満は419人いました。

わが子を探し続け

一方、震災から10年近かった今も、行方不明の家族を捜し続ける人たちがいます。宮城県石巻市立大川小学校では、児童108人のうち70人が亡くなり、4人が行方不明のままです。4年生だった

復興とは何か
震災以降、国は被災地の復興を掲げて街づくりを進めてきました。津波で家を失った人たちのための復興住宅が完成し、大規模な津波に備えた防潮堤が新たに築かれました。しかし、震災で取り戻せなくなった景色もあります。



昨年未の南浜・門脇地区。復興新築公園などの整備が進められています

大川小のある大川地区は北上川の河口に近く、大きなカキやシジミが取れる自然豊かな土地です。震災後に別の学校に間借りし、高台での再建を目指した大川小は、地域の子ども数が減ったことから18年で閉校してしまいました。「学校は地域の中心で、子どもは地域の未来。ど



イラスト：にしむらあき



震災直後の宮城県石巻市南浜・門脇地区＝2011年3月21日

ちらもなくれば地域は消えてしまふ」となげくお年寄りもいます。

若い世代や子どもがいなくなると、地域で受け継がれてきたお祭りなどの伝統行事が途絶えてしまいかねません。震災で東京電力福島第1原子力発電所(福島県大熊町・双葉町)が爆発した事故の被災地では、放射線の値が高く、住民が帰れない場所が今もあります。

ある被災地の若者は「復興したかどうか」という問いは外から見ただけではわからない」といいます。この若者は「復興」という言葉にとらわれず、かつてあった景色や日常を少しでも多くの人に伝えることで震災を語り継いでいきたいといいます。本当の復興とは一体、何でしょうか。被災地の声に心を傾け、考えてみてください。

＝2面に続く

スペシャル



作家の池澤夏樹さん

◇プロフィール 1945年、北海道生まれ。88年に「スティル・ライフ」で芥川賞を受賞。東日本大震災に関する著書に「春を恨んだりもしない 震災をめぐって考えたこと」や、震災が題材の小説「双頭の船」などがあります。「南の島のティオ」など、子ども向けの小説も手がけています。

作家の池澤夏樹さん(75)は、東日本大震災の被災地を訪ね、考えたことをエッセーや小説の形にして表現してきました。池澤さんに、震災の影響や歴史から学ぶべきことについて聞きました。

――面からつうへ

普通に暮らして備えを

震災から、もうすぐ10年で、自分たちをなすべきめながら生きてきたように思いますが。被災地によく通いました。現地でできた友人たちは生活が安定した人もいれば、交流するうちに亡くなった人もいます。

最悪を想定しても、それを超えるものがある。そうした覚悟というか、認識を持つていなければいけません。

被災地へ修学旅行を

震災の記憶がない若い皆さんには、被災地への修学旅行を提案しています。例えば、津波にのまれた仙台空港から宮城に入り、多くの人命が救われた仙台南部の震災遺構・荒浜小で、屋上まで走る避難訓練を試みる。そうして災害とは具体的にどういうものか、身をもって考える。

先生や教育行政の人たちには、児童と教職員84人が亡くなった大川小に足を運んでほしい。事前の備えを

もいる。それが歳月というものです。では、この10年弱で社会は変わったのでしょうか。

震災で、私たちは生活の土台というものが実は不安定なものだと思われられました。今の新型コロナウイルスも同じ。「足をすくわれる」という感覚を学んだはずで

忘れることはもちろん、現場で判断するリスクを恐れる教育システムであってはず、自分たちに置き換え、想像してほしいのです。

自然の中で生きていければ、災害は必ず来ます。天災は避けられないが、人災はなくなる。震災の教訓を全部生かして備えることが、未来に対する義務です。

災害の多い島国

歴史を見れば、日本はヨーロッパのように外国から攻められることはあまりないが、自然災害が多い。そうした島国としての歴史認識を持っていた方がいい。それが私たちの生きる条件で、それを踏まえ未来図を描かなければならない。遠くを見る望遠レンズと、近くを見渡す広角レンズの両方が必要です。

大規模な災害が増え、自然が私たちに自然の脅威を「思い出せ」と言ってくれている気がします。その声にどう応じるか。

伝えたいのは「備えて、忘れていなく」ということ。災害を想像して準備するが毎日おびえる必要はない。普通に暮らしていればいっしょです。

(談)